



僕の部屋が  
ダンジョンの

休憩所に

なってしまった件

2

試読版

# 1 引っ越しするとやってくる闇の件

東京の郊外、立川市。2LDKで月3万円の超格安訳ありマンションに引っ越した。

この部屋が超格安だった理由は、一言で説明できる。

そう。引っ越し先の部屋は、何とゲーム世界のようなダンジョンと繋がっていたのだ。

そして異世界の住人である金髪の女騎士のリア、エルフの魔法使いのデイト、人間を主人にする白スライムのシズクが、なし崩し的に部屋に住むようになってしまった。



僕は、夜な夜な玄関の扉からダンジョンに潜っていた。

「くっくくく。居た居た。水色のスライムだ」

そっと近づいてスライムにピッケルを叩きつけると、見事にブルンツと四散した。

「ふう。よし！ これで付近のモンスターはいなくなったかな？ おっ」

身体から力が沸いてくる。どうやらレベルが上がったようだ。

【名前】	鈴木透 <small>スズキトウ</small>
【種族】	人間
【年齢】	21
【職業】	無職
【レベル】	5 / ∞
【体力】	26 / 26
【魔力】	39 / 39
【攻撃力】	11 / 9
【防御力】	44
【筋力】	15
【知力】	26
【敏捷】	17
【スキル】	成長限界なし

人物鑑定LV1 / 10

お、いいぞいいぞ。ステータスをチェックしようと思うと、心の中に映像イメージが浮かび、レベルが1上がっていることに気が付く。リアルの世界でも、【筋力】が1上がったら握力が4上がる。

つまり、引越し前までは握力40kgだったのが、今では60kgになった。

ん？ 【人物鑑定LV1/10】だど!?

「そ、そういえば、ディートが言っていたな。通常のレベルが上がると、スキルを新しく覚えたり、スキルレベルが上がることがあるって」

レベルが5になったことで、新たに覚えたスキルっぽいぞ。

これもディートの言っていたことだけど、他人のステータスや自分の隠れスキルを確認するためのスキルだと思う。

ディートのステータスは教えてもらったけど、リアのステータスはまだ知らない。

機会があったら【人物鑑定】を使ってみよう。楽しみだ。

「さてと、明日もバイトがあるし、あまり夜更かしせずに寝ますかね」

ガチャリと小さな音を立てて、そおっとダンジョンの石壁に存在する玄関から部屋に戻った。部屋には洋室と和室があり、僕は洋室で、他の人は和室で寝ている。

みんなを起こさないように、抜き足差し足、静かに洋室に移動する。

寝間着に着替えて、少し掛け布団に膨らみのあるベッドに潜り込んだ。

「レベル上げの調子はどう？」

「ふふ。やっぱりデイトか。1上がったよ」

掛け布団の中から、耳の長い美人が顔を出す。

「あら？ 驚かすつもりだったのに気が付いてた？」

「ベッドに入る時に掛け布団が膨らんでいたからね」

誰かはいると思っていた。リアやシズクなら、僕に隠れてこんなことはしないだろう。

「ふふふ。ダンジョンマスターを目指して、レベル上げ頑張ってるのね」

このヨミのダンジョンは、ダンジョンマスターという主がいるタイプらしい。ダンジョンマスターになると、年を取らなくなる。

デイトはハイエルフで寿命が長いので、僕をダンジョンマスターにしてずっと一緒に過ごすかと思ってるらしい。

「いや、レベルを上げてるのは、腕力が上がったたり、早く走れるようになって面白いからだよ」

「えー！ ダンジョンマスターを目指してるんじゃないの？」

「そんなことより、早く和室に戻りなよ」

喧嘩にならないように、僕は洋室のベッドで寝て、リアとデイトは和室の布団で寝ること

になっている。

「ひどい、トオル。せっかくスクール水着で喜ばせてあげようと思ったのに」  
な、何だと？

「ううう」

デイトは長命なので、友だちができてほっちになっってしまうらしい。可哀想だし、今日ぐらいはいいか。スクール水着の聖紺色と肌触りの誘惑に負けたわけではない。

「仕方な……」

と言おうとした時、急に洋室のドアが開いた。

「ト、トール様。朝になる前に戻るんで、ちょっとだけ一緒に寝ていいですか？」

げっ。ブルマ姿で枕を持ったリアが立っていた。

「あああああ！ 何でデイトさんがいるんですか？ 私たちは和室で寝るって約束でしょ！」

「リアだって来てるじゃない！」

う、うーん。引っ越し先がダンジョンと繋がっていたことで始まった不思議な生活にも馴れつつあるけど、このまま異世界人と暮らしてしまっただけなのだろうか。

僕はそんなことを考えながら、リアのブルマのお尻と、デイトのスクール水着でパツツンパツツンにしている大きな胸を眺めた。

——もうしばらく、このままでもいいよね。



「ただいま」

騒動があった翌日、バイトに行つて和室の窓から帰宅すると、リアとデートが迎えてくれた。

「おかえりなさい」

「あっ、おかえりなさいい」

結局、この生活はやめられそうにない。玄関を使えば、さらに嬉しいのだが。

「遅くなっちゃったから、夕ごはんを買ってきたよ」

それを聞いたデートが眉をしかめる。リアが言った。

「え？ 買ってきたんですか？」

あっ。リアに対しては、僕がダンジョンに隠遁する大賢者という設定になっているのを忘れていた。

どうしようと思っていると、デートが誤魔化してくれる。

「トオル様は、転移魔法で遠い国に行くことができるのよ」

「そ、そうなんですか？ 転移魔法なんて伝説級の魔法ですよ」

リアからは見えない角度で、デートにお尻を軽くつねられた。気を付けろということだろう。

「ま、まあね」

テーブルにハンバーガーとフライドポテトを並べる。サイドメニューとして、冷蔵庫の野菜でサラダを作ることにした。

「見た目にもすごく美味しそうですね。あつ、これ前に食べたハンバーガーをパンで挟んであるんですね？」

「よく分かったね。ハンバーガーをパンで挟んだものはハンバーガーって言うんだ」

リアも嬉しそうだったが、意外にもデートが喜んだ。

「それが例のハンバーガーなのね。リアから美味しいって聞いて食べたかったのよ」  
ほく。2人は、僕がいないうちに結構話しているのか。

性格は真逆のような気もするけど、意外と仲よくできるかもしれないな。

「じゃあ、温かいうちに食べよう。いただきますーす」

「いただきます？ 何それ？」

デイトは、魔法の詠唱かと思ったのかもしれない。

「えーと。食べ物って命だよ。命をいただきますっていう挨拶みたいなものかな。おばあちゃんになるべく言えて。今は大きめの声で言っちゃったけどね」

「なるほど。トオルっておばあちゃんが好きよね」

「僕は、おばあちゃんに育てられたから」

「ふーん」

デイトがさらに何かを聞こうとすると、「いただきます！」と大きな声が聞こえた。

「リア……」

「今の話、すごくいいですね。私も真似しました」

「そうね。私も言おうっと。いただきます！」

2人の美女が、おばあちゃんの教えを引き継いでくれた。

こんなに嬉しいことはない。

「ん〜ん〜！ これ本当に美味しいわね〜！ リアが美味しいって教えてくれたけど、期待以上だったわ」

デイトもハンバーガーを美味しいと思ってくれたらしい。

和室の押し入れにもハンバーガーを入れておいたから、白スライムのシズクも堪能している

だろう。

「ディートさん。このハンバーガーも美味しいですけど……」

「ん？ 何？」

「以前、トール様を作ってくださいだったハンバーグは、もっと、もおおっと、美味しかったですよ。卵の黄身がトローンってソースに絡まって」

リアが出来合いのハンバーガーよりも、僕が真心込めて作ったハンバーグの方が美味しいと言ってくれた。ご褒美にチューしてレベルの成長限界を上げてあげたい。

3ぐらい上げてあげたい。

だが、急にそんなことをしたら、ビンタを食らう可能性もある。

【筋力】が1上がったら、握力が4上がるのだ。

筋力方向にステータスが上がったリアからビンタをくらったら、首が折れてしまうかもしれない。ご褒美は他のものが無難だろう。

「ごちそうさま」

別世界の2人にも、ごちそうさまの習慣を教えた。

食後はティータイムだ。2人に飲みたいものを聞いたら、意外にもコーラと答えた。

「コーラって、最初は薬味だと思いましたが、結構美味しいですね」

リアはコーラにハマりだしているようだ。

デイトがコーラを飲みながらニヤリと笑う。

「そうよねえ。トオルから飲ませてもらったコーラの味は格別だったわー。うふふふ」

げっ。デイトは、僕がコーラを口移しで飲ませたことをリアに言うつもりじゃないだろうな。

や、やましいことはない。

彼女を救うために、毒消しとして口移しで飲ませただけだ。

僕は、リアが見ていない隙にデイトに両手を合わせた。

エルフはよろしいという顔をする。

まあ、そんなこともあるが、ともかく素晴らしい空間だった。

畳の上で、ブルマとスクール水着を来た美女2人とコーラを飲みながらマツタリする。

僕の至福の時間をぶち壊す男が来たのは、そんな時だった。

——ピンポーン。ピンポーン。

ドアベルが鳴った。

「この音は何ですか？ 怖いです」

リアが電子的な音に怯える。そりゃ、中世の世界にはない音だろうから当然だ。

こんな時間に一体誰だろう？

「鈴木さん。いますよねえ？ N N Kの契約に来ましたよ」

2人の顔を見ると、訳が分からないといった顔をしている。

N N Kの人が、普通に契約に来たようだ。

ま、まあいい。僕はテレビを見ない。ゲームはパソコンでするし、スマホはテレビが見られないタイプだ。

N N Kを恐れる必要はない。

「け、契約って何でしょう？」

けれども、リアは恐れていた。当然だ。不可思議な電子音を鳴り響かせ、ダンジョンの奥に住まう大賢者に、何らかの契約を一方的に迫る謎の人物が現れたのだから。

「闇の魔導師かもしれない。2人は和室にいてよ。僕が対処する」

N N Kの人に、ブルマ姿の金髪美少女とスクール水着姿のエルフ美女を見せるわけにはいかない。

絶対におかしな性癖を持っている人物と思われるってしまうだろう。いや、おかしな性癖は誰だって持っていると思うけど、それを無理やりに実現する、とんでもない輩だと勘違いされてし

まう。

最悪、ニュースになってしまいかもしれない。

「ひ、一人で大丈夫ですか？」

「大丈夫です。僕は大賢者ですよ」

玄関に近づくと、勝手にドアが開いた。

玄関の扉越しに見える景色はカビ臭いダンジョンではなく、やはり排ガスの臭い溢れる日本だった。

「どうもー。NNKから来ました江波と申します。鈴木さんは引越してこられたようですね。契約していただかないとー」

「勝手にドアを開けないでくださいよ！」

鍵を忘れたいみたいだ。

馴れてしまったとはいえ、ダンジョンに繋がっているというのに、さすがに不用心かもしれない。

それにしても、NNKはどうして引越してきたことがすぐに分かるんだろうか。まあ、どうせうちにテレビはない。

「うち、テレビはないんですよ」

「ええ？ 本当に？ テレビがない？」

「今時、ネットですら十分ですよ」

「でも携帯でワンセグを見られたりするんじゃないですか？」

「このスマホはテレビが見られないんですよね」

僕はニッコリと微笑んだが、NNKは引かなかった。

「こんな立派なところに住んでて、本当はテレビあるんでしょー？」

「いや、本当にはないですよ」

「じゃあ、ちよつとだけ」

何と、江波さんは半開きのドアから勝手に室内に入り込もうとするではないか。

「ちよつ、ちよつと」

「テレビがなければ問題ないんで。ちよつとだけ、確認させてください」

「ダメですよ！ 勝手に家の中に入っていいと思ってるんですか！」

奥にはブルマとスクール水着姿の2人がいるのだ。絶対に見せたくない。

まかり間違ったら、NNKで報道されてしまう。

だが、相手は相撲取りのような体格で力も強かった。このままでは、部屋の中に入られてしまふ。

玄関に完全に入れられ、ドアが閉まった時だった。

ブルマ姿の金髪の美少女がやって来て、江波を押し込んだ。

江波さんは吹っ飛び、完全に閉まっていたドアを再びぶち開け、真つ暗なダンジョン側に向かっていた。

「それにしても大丈夫かな？ 死んだんじゃないだろうな？」

肉弾系職業でレベルを上げているリアのツツパリの威力は、伝説の横綱、朝紺龍を超えていてもおかしくない。

「闇の魔術師ですから、きつとこの程度では問題ないでしょう」

そうだろうか。そうだといいな。頑張ってくれNNK。

本当にリアの言う通りだった。

「鈴木さん。困りますよ。本当はテレビあるんでしょ。契約は必ず……って何じゃこは  
~~~~~！」

そりゃそうなるだろうな。ダンジョンなんだから。

それにしても江波さんはタフだった。大怪我をしたかと思っただけ。

「NNKと契約したくないからってイリユージョンまで。そりゃ、ちよつとやり過ぎなんじゃ  
〜ギャピピピ〜！」



江波さんの横には、いつの間にかデートが立っていた。

「スタンシヨックよ」

魔法の名前で分かった。スタンガンのような魔法だろう。

とりあえず、動けなくなった江波さんを部屋の中に入れる。

ドアは歪んでいて、力を入れないと閉まらなくなっていた。

リアは怒らせない方がいいようだ。

「この魔法って、体にダメージは残る？」

デートにこっそりと聞く。

「大丈夫よ。しばらく痺れるけど」

それを聞いた僕は、和室の窓から江波さんを外に運んで、車に轢かれないように道の端に座らせた。

「お、重かった……」

酔っぱらいと思われるように、ゴミ置き場からいくつかのビールの空き缶を拾って置いておく。

「つ、つつつ次こそはテレビがないか確認させてもらいますからね！」

本当に筋金入りの男だ。ブルマやスクール水着姿の美女がいることよりも、テレビがあるか

どうかの方が重大らしい。



「じゃあ調べさせてもらいますよ」

数日後、江波さんがまた来た。どうしても契約を取りたいらしい。この際、徹底的に調べてもらうことにした。

「本当にしつこいですね。家上がるなんて違法じゃないんですか？」

「鈴木さんがいいって言ったんじゃないですか！」

もし、僕が居ない時に来て、リアやデートと押し問答になったら死んでしまうかもしれない。2人を殺人者にしたくはない。

それに、江波さんのおかげでドアベルが普通に使えることが分かった。

テレビがあるかどうかチェックするぐらいならいいだろう。どうせないんだしね。

「はいはい、どうぞどうぞ。それから帰る時は和室の窓から帰る約束ですよ」

幸いなことに、彼はブルマを穿いた金髪美女がいても気にもならないらしい。

「浴室なんて探したってないですよ」

「今は浴室テレビっていうのもあるじゃないですか」

江波さんは、浴室までテレビがないか探している。

リアが僕を守るように江波さんとの間に立っていた。

「ないですね。それにしてもお嬢さん……」

げっ。ついに金髪ブルマにツツコミが入るのか？

「いいツツパリでしたね。私、こう見えても元力士だったんですが、驚きましたよ」

そ、そうだったのか。どおりでガタイがよくてタフなわけだ。

「ないな……」

だからないって言っているだろうに。

江波さんは、浴室に続いて洗面所、ダイニング、洋室とテレビを探していく。最後は和室に  
来た。

「和室にも一見ないですね。しかし押し入れの中に」

「ちよっと待て」

「何ですか？ やはり押し入れにテレビが！」

「違います」

「じゃあ、何なんですか？」

僕は江波さんに耳打ちした。

「この中にはエロ本……もとい薄い本が入っているんですよ。彼女に見せるわけにはいかないでしょう」

「エロ本なんか健康な男子なら誰でも持ってますよ。隠す必要はないでしょう」

ダメだこの男。何を言っても無駄らしい。僕はリアを連れて和室を出た。

「いいんですか？ あの中には禁書が！ はっ!? 闇の魔術師の狙いは禁書では……」

「いいんだ。好きにさせてやろう」

しばらくすると、江波さんは戻ってきた。完全に肩を落としている。だんだん可哀想になってきた。

「本当にありませんでした……」

「そうですか。元気を出してください」

「力士時代は膝を痛めたため、NNKで少し映してもらうまでしかいかず……NNKに恩を返そうとしても契約が全然とれない……」

よく分からないけど、テレビで映してもらうまでつてすごいんじゃないか？

「でも私は諦めませんよ。鈴木さんがテレビを買う頃に必ずまた来ますから」

「また来るのは仕方ないですけど、僕がいる時にしてくださいね。この子たちだけしかない

時に来たら本当に死んじやいますからね」

江波さんは、僕が言ったことの意味が分かったのか分かっていないのか、ともかく、玄関から帰っていった。

「ふう、やっと帰ったか……」

そういうえば、デイトはどこに行ったんだろう？

リアは、どうやら洗濯をしてくれている。最初は洗濯機をアーティファクトがどうしたらか言っていたが、もう慣れてたようだ。

「リア、ちよつとデイトを探してきますね」

「はい」

脱衣所のリアを置いてデイトを探した。

和室に行くと、何かを片付けているデイトがいた。

げっ、手に持つてるのは禁書じゃないか。

江波さん……テレビを探した時に散らかしたまま帰ったんだな。

「ぞ、それは」

言い訳をしようとしたが、デイトは何事もなかったように押し入れを開けて禁書をしまった。

「ちゃんと奥に隠しておかないと、リアに嫌われるわよ」

「いや、あのその」

「別に隠さなくたっていいわよ。トオルの好みの勉強に1〜2冊貸してよ」

「いいっ!？」

あの本を渡したら、あんなことをしてくれるのだろうか。いや、デートに渡すならあの本の方が……。

「こ、これかな」

最初は強気の女の子が、だんだんと従順に言いなりになるような薄い本だ。デートにピッタリ、かつ王道！

デートが微笑む。

「じゃあ、この本を持って帰ろうかな」

「へ？」

## 2 クリックレベル上げ大作戦を発動する件

「私、一旦、自分の世界の地上に戻ろうと思っているの」

デイトが突然言い始めた。

「日本で換金できることも分かったし、金貨を持ってこようと思って」

確かにありがたいけど、異世界の金貨を日本円に換金するのは、あくまで急場しのぎだ。

それにデイトと一緒にいるのは、僕にとって損得勘定ではない。

「べ、別にそんなのいいよ」

「すぐ帰ってくるから。いきなりトオルの部屋に押しかけちゃったから、向こうで片付けたいこともあるしね」

僕をダンジョンマスターにするために、この部屋に居座るのかとも思ったけど……そりゃそうだよな……。

「じゃあダンジョンを抜けるための準備が必要だね。よし、日本の食料や役に立ちそうな道具をリュックサックに入れるから、おみやげに持っていくといいよ」

「うん。ありがとね。トオル」

僕とデイトはリュックサックに食料や道具を詰め込む。

「地上までどれぐらいかかるの？」

「私1人なら3日ぐらいかな」

そうなのか。なら向こうでの用事を考えれば、戻ってくるのに2週間ぐらいかかるかもな。

「気を付けてね」

「うん」

まだ出会って数週間だし、平穏な新生活を求めているのに、居なくなると思うと寂しくなるからおかしなものだ。

あれもこれもと食料や道具を入れたり、やっぱり詰め込みすぎだと出したり、和気あいあいと荷造りをしていく。

「ところで、いつ帰るの？」

「今晚泊まって、明日帰ろうかな」

「じゃあ、今夜はデイトを送るパーティーをしよう。美味しいものを作るね」

「トオル……ありがとうね」

そんなやり取りをしながら、不思議な部屋での楽しい共同生活を思い出す。

ふと、何かが心に引っかかった。

この部屋は、玄関から出たらダンジョンに繋がるのだ。

ちよつと待てよ？　NNKの江波さん、帰る時は和室の窓からと伝えたのに、玄関から出て行かなかったか？

僕は、慌ててヘッドライト付きヘルメットとピッケルを装備した。

「な、何？　どうしたのトオル？」

玄関を開けると、そこにはスライムやら見たことのないモンスターが楽しそうに闊歩かほしていた。

「お前、こら！　受信料払ってるのか！　このっ、このっ！　うわー！ー！」  
奥の方から江波さんらしき声も聞こえてくる。

モンスターに気が付かれる前に、そつとドアを閉めて鍵をかけた。

「江波さんが鉄の扉を開けちゃって、モンスターが溢れかえっている。どうしよう……」  
僕はまだレベルが低い。ディートが切迫した声を出した。

「急がないと」

ディートも緊急事態であることに気が付いたようだ。

和室から杖を持ってくる。

「ダンジョンに行かれるんですか？」

洗濯をしていたリアも切迫した状況に気が付いたのか、盾を持ってやってきた。武器はなくても、壁役はしてくれるようだ。

「ドアを開けるぞ！」

「いいわ！」

「行きましよう！」

僕がドアを開けると、2人は一斉に飛び出した。

いきなりオオムカデが2人を襲う。リアが盾でそれを防いだ。

入れ替わりで、デイトが魔法を発動する。

「メガインフェルノ！」

オオムカデや他の有象無象うざうざのモンスターが、一瞬にして業火に包まれて焼きつくされた。

その威力は、かつて鉄の扉に挟まれたオオムカデを焼いた炎の比ではない。

ピッケルで叩くまでもなく炭と化した。

「ガンガン行くわよ！」

「頼む！」

僕は後ろの方で、スライムや手足のようなものがある動くキノコをピッケルで一生懸命叩い

ていた。

おつ、力が湧き出る。レベルが上がったみたいだ。

リアが大型のモンスターの攻撃を盾で防ぎ、ディートが魔法で敵を一掃するという連携によって、すぐに鉄の扉までたどり着いた。

「よし！ ボタンを押してくれ！ リア！」

「はい！」

ゴゴゴと音を立てて、鉄の扉が降りてくる。

また完全に密室になった。

小さなモンスターは残っているかもしれないが、大きなモンスターはもう見当たらない。

だが、江波さんの姿もまたなかった。

「えええ？ 何で居ない？ ここは密室だぞ！」

「死体もないわね。もし、食べられたとしても……何か残ってそうだし……」

ディートの言う通り、あれだけ大きな人間が跡形もなく食べられてしまうとも思えないぞ。

だが鉄の扉の先には、こちら側の世界の人は通れない石壁があるはずなのだが。あっ！

「そういえば、受信料を払えとか叫んでいたのが聞こえたな……。ひよつとしてモンスターと揉み合っているうちに……」

「それしか考えられないわね。モンスターに触れていても通れたのね」

まずいな。僕が倒したスライムやお化けキノコであれば、江波さんなら素手でも何とかなるだろうけど、オオムカデに襲われたら殺されてしまうだろう。

どうしようと思っていると、ディートが言った。

「私、このまま向こうの世界に帰るわね」

「え？ そんな……今日のパーティーはどうするんだよ？」

まだ食材は買ってないけどさ。

「早く江波を追わないと、モンスターにやられちゃうかも」

確かにそうだ。自分が住んでいる部屋のことと他人に死なれては寝覚めが悪い。

法律も無視しているけど、悪い人ではない。

「分かったよ。ちょっと待ってて」

僕は部屋に戻って、ディートと一緒にいろいろ詰めたリュックサックを持ってきた。念のため、ブルマとスク水も入れてある。

「これ。必ずまた来なよ」

「もちろん。私、トオルをダンジョンマスターにして、ずっと一緒に暮らすの忘れてないからね」

「もし……なれたらね」

僕は、笑顔で鉄の扉が開くボタンを押した。

鉄の扉がだんだんと開いていく。

「私のことも江波のこともいいから、カメラを設置するまでは危ないから鉄の扉は閉じときなさい！」

「そうするよ。なるべく早くカメラを付ける！」

「じゃ、またね」

ディートは笑いながら、鉄の扉の向こうにある石壁に飛び込んで消えた。

ボタンを押す。鉄の扉が徐々に閉まっていく。

閉まりきるのを確認する前に、僕とリアは手を繋いでマンシヨンの部屋に戻った。

リアには、石壁を通り抜けたように見えたはずだ。しかし、その感想は言葉にせず、ディートの心配をしていた。

「ディートさん、大丈夫だといいですけど」

「ディートなら大丈夫だよ。江波さんも生きてるといいけど」

「そうですね。ディートさんは、魔法使いなのにいつも一人でダンジョンを探索してるんだし」  
部屋に戻ると、リアは思い出したように話し始めた。

「ところで、先ほどのダンジョンマスターになってディートさんと暮らすとかなんとか……そ

れ以外は話の意味が分かりませんでしたが……一体どういうことですか？」  
げっ、リアはダンジョンマスターについてどの程度知っているんだろうか。

「あ、あれはデイトが勝手に言っているだけです」

「詳しく教えてくださいね」

リアの笑いは、どこか恐ろしかった。



僕は今、ネットで見つけた防犯カメラの業者さんに電話していた。

鉄の扉を開閉するのは危ないからカメラを設置した方がいいと、デイトも言っていた。

『ご自宅からちよつと距離がある離れに、カメラを設置したいということですね』

まあダンジョンという離れだけだね。

「できますかね？」

『もちろん、できますよ。長い電源コードと同軸ケーブルがあればいいだけです。LAN  
ケーブルや無線もありますけど、同軸ケーブルが一番安定しますね』

おっし！ どうやらダンジョンに防犯カメラを設置することはできるようだ。

安い無線LANタイプもあるようだけど、店舗で使われるような本格的なものにした方がいいだろう。

ダンジョンの厚い壁は、無線を通さないかもしれないし。

同軸ケーブルっていうのは、確かテレビのアンテナとかに使う線だよな。機能的な部分も聞いておくか。

「録画でなくリアルタイムでも見られますか？」

『今のカメラは大体、お客様のいうところのリアルタイムであるライブ機能と、それを録画するレコード機能、後から再生するリプレイ機能は全部ついてますよ』

ライブ、レコード、リプレイか。ふむふむ。

ますます僕にとって素晴らしい。

「暗い場所でも映りますか？」

『そうですね。暗所を映せるカメラもありますよ。昼間より画質は落ちますが、カラーじゃなくて灰色っぽくなりますけどね』

あ、テレビで夜行性の動物なんかを映す時によく見るアレか。

『動物か人間か分からない侵入者がいるんですか？』

「ええ……」

動物か人間かっていうよりも、モンスターかエルフかって感じですけど。

『カメラとセンサーライトを併用するって手もありますよ』

「ああ、近づくると光るライトですね」

『そうですね。明るくなれば映像もはっきりします。侵入者なら証拠にもなりやすいんじゃないでしょうか？』

なるほどねえ。でも「ゴブリン！ お前侵入しただろ！ これが証拠だ！」とやっても、ゴブリンは勝手に入ってくるだろう。

とりあえず、暗所でも映るならカメラだけでいいかな。

「パソコンで見ることできますか？」

『専用レコーダーとモニターで見ることが多いですけど、拡張すればできますよ』  
なるほど。どうでしょうか？

パソコン本体はタワー型で床に置いてあるから、パソコンデスクの上はまだ広い。  
もう1台ぐらいモニターとレコーダーを置きそうだ。

『専用レコーダーとカメラがセットになった、お求めやすいタイプもありますよ』

確かに業者のサイトを見ると、夜間もよく見られるカメラと専用レコーダーがセットになっているものが、バラバラで買うよりも安い。

レコーダーを操作するマウスやケーブル、取り付け器具が付属するようだ。

「映像ケーブルや電源ケーブルを長くすることは可能ですか？ 2本は40mとかあるといいんですが……」

『サービスで交換しますよ。セットのものも結構長いものですしね』

「本当ですか。ありがとうございます。じゃあそれにしようかな」

『モニターはどうします？』

「モニターはパソコンのものでも流用できますよね？」

『レコーダーと接続できれば、もちろん見られますよ』

いいね。ちょうど余ってるモニターがある。

じゃあちよつと高いけど、カメラ4台タイプにしようかな。カメラの台数で値段が変わる。

カメラが4台あれば、玄関の前、大部屋全体、鉄の扉の内側、そしてゆくゆくは鉄の扉の外側に設置できる。

これで、パソコンデスクからダンジョンの大部屋の状況を完全に把握できる。

もちろん安全も確保できるだろう。

12万円の出費は痛いけど、しょうがない。貯金がどんどんなくなるな。

リアルでレベル上げをするためだ。ソシャゲに全力で課金したと思おう。

「じゃあ、カメラ4台セットを買いいます」

『ありがとうございます。工事はいつしますか?』

「え?」

『お客様の場合は10万円以上のお買い上げですので、工事代はサービス価格の2万円になりますけど』

2万円も痛いが……工事だと……?」

「……ダンジョンなんですけど、工事できますかね?」

『へ? ダンジョン?』

「いえ、何でもありません。機材だけ買って、自分で取り付けることはできますか?」

機能は想像以上に良さそうだけど……ダンジョンで取り付け工事をしないといけない問題があつたんだつた。

『ご自身でやられる方もいらつしやいますよ』

「注意点とか教えてもらえますか?」

『そうですね。お住まいはどんなタイプですか?』

うちは、マンションとダンジョンを足したマンジョンタイプですと言いたかった。



「で、実店舗がある店だったから、機材だけ買ってきたんだけど」  
リアが不思議そうに聞いてきた。

「これ、何ですか？」

「めっちゃ便利なアーティファクトだよ。でも設置が難しいんだ。やり方は……賢者仲間から聞いたけどね」

とりあえず、余ってるモニターとレコーダーで室内を映してみるか。

レコーダーとモニターをパソコンデスクに置き、電源を入れる。

「よし。モニターは流用だけど繋がったぞ。後は……和室にカメラを」

和室の畳の上にダンボールで台を作り、適当にカメラを置く。レコーダーを同軸ケーブルで繋げて、和室のコンセントで電源を確保した。

これでできたんじゃないかな。

洋室に戻ると、モニターを見ていたリアが目を白黒させていた。

「さ、さつき！ 畳の部屋で！ トール様がこの中に！」

どうやら成功しているようだ。

モニターには和室が映っていた。

ちなみに、シズクは押し入れの中にいる。薄い本を読んで、さらなる知識を蓄えているかもしれない。

「まあ。ここまでではできて当たり前なんだよなあ……」

ここから先が難関だ。

同軸ケーブルと電源ケーブルを、どうやってダンジョンに通すかという問題がある。

マンシヨンのコンクリートに穴を開けると、大家さんに怒られてしまうだろう。

「やはり業者さんに聞いた方法を使うしかないな。あつたあつた。エアコンの配管を通すための配管孔だ」

エアコンは、部屋の外にある室外機に繋がないと機能しない。

つまり、その配管の穴からケーブルを通すわけだ。

「配管孔の大きさが配管ピッタリだと、ケーブルは通せない。もしくはエアコンの配管を外して暑さ寒さを我慢するしかない。でも普通は配管より大きめの穴を作って、ガムのような粘土パテで隙間を埋めているはずだ」

ビンゴ！ かなり雑な仕事でパテも取れかかっているし、隙間も十分にありそうだ。

「助かった。これなら同軸ケーブルもここから外に全部通りそうだ。電源ケーブルは、1本通

したものをダンジョン内で分岐させればいいしね」

とりあえず、1本だけ同軸ケーブルと電源ケーブルを通す。

エアコンの配管孔の位置を考えれば、ダンジョンに同軸ケーブルと電源ケーブルの先が出ていそうだけど……。

「よし、リア。ダンジョンに行きましょう」

「ダ、ダンジョンですか？」

「そりゃダンジョンにこのカメラ……というアーティファクトを設置しないとイケないですから」

「分かりました！」

僕は、ヘッドライト付きヘルメットをかぶって気軽に玄関のドアを開けた。

ダンジョンに出て、リアと一緒に石壁を見る。

「ないぞ……。同軸ケーブルも電源ケーブルも……」

位置的にエアコンの配管孔がありそうなところも、ダンジョンの大部屋の石壁も隈なく調べたが、ケーブルは出ていなかった。

「ぞ、そんな……」

まさか12万円が無駄になってしまったのか。悲し過ぎるぞ。

そんなことより、計画が白紙になってしまふのが辛い。

「ん？ ケーブルを通す時は、玄関を閉めたまま押し込んで通したよな？ 日本に出ちゃったのかも！」

一旦、リアとマンションの部屋に戻ってケーブルを引っ張る。先端がエアコンの配管孔から戻ってきた。そして、玄関の扉を開けっ放しにして、ダンジョンが見えるままにした。

「この状態なら、ケーブルもダンジョンに入るんじゃないかな？」

もう一度、同軸ケーブルと電源ケーブルを、外に繋がる配管孔から通し直す。

「よし！ 通ったぞ。リア、もう一度ダンジョンに行きましょう！」

「は、はい！」

ダンジョンの配管孔がありそうな場所をヘッドライトで照らす。

「あつた！ あつたぞ！」

ダンジョンの無機質な石壁から、2本のケーブルがひよこつと出ていた。

1時間後、カメラの設置が完了した。

玄関の前を映すために1台、大部屋全体を映すために1台、そして鉄の扉の前に1台。

今は適当に粘土パテで石壁に固定しているんだけど、明日届く予定の電動ドリルで石壁に小さな穴を開ければ、取り付け器具でしっかりカメラを固定できるようになるだろう。

試し読みはここまで

続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

[http://books.tugikuru.jp/detail\\_bokudan.html](http://books.tugikuru.jp/detail_bokudan.html)

